

2019「植村直己冒険賞」受賞者が決まる！

全盲のハンディキャップを抱えながら
太平洋横断

いわもとみつひろ
岩本光弘さん



写真提供：(株)舵社

岩本光弘



写真提供：ダグラス・スミスさん

1966年12月27日、熊本県天草市生まれ。指鍼術師。13歳で残存視力を失い始め、16歳で全盲となる。88年3月熊本県盲学校専攻科理療科卒。89年、23歳の時に広い世界を見たいと、奨学金を得てSan Francisco State Universityに留学(～91年)。92年、26歳の時に筑波大学附属盲学校で教員として勤務(～2006年)。06年、米カリフォルニア州サンディエゴに移住。著書「見えないからこそ見えた光」(ユサブル)

2月12日、植村直己さんの母校の明治大学紫紺館(東京都千代田区)で、2019「植村直己冒険賞」受賞者発表の会見を行いました。今回は、2019年に日本人が挑んだ206件の冒険行の中から、目の不自由な人がヨットを操る「ブライインドセーリング」で無寄港太平洋横断に世界で初めて成功した岩本光弘さんが選出されました。

岩本さんは、2月25日(日本時間)、米国・サンディエゴを「ドリームウイバー号

(夢を織る船)で出港、低気圧や前線に10回以上も遭遇し、台風並みの低気圧を避けるために1000マイル(約1600km)以上も逆戻りするなど、数々の困難を乗り越えて、4

月20日、福島県小名浜港いわきサンマリナに到着しました。航海日数は54日3時間4分、航海距離は1万3千km。パートナーの晴眼者(目の見える人)が風の向きなど状況を伝えながら、岩本さんがヨットの舵と帆を操る「ブライインドセーリング」です。東京での会見の様子は、植村直己さんの母校の府中小学校にも中継され、参加した6年生児童を代表して安井理雄さんが、岩本さんにお祝いのメッセージを届けました。

本賞の授賞式は、6月6日(土)に日高文化体育館で予定しています。冒険賞の授与の他、岩本さんの講演も行われますので、皆さん、楽しみに待っていてください。



▲福島入港時、フォアデッキで係船ロープを準備する岩本さん (写真提供：(株)舵社)



▲2019年2月25日米国サンディエゴを出港 (写真提供：比企啓之さん)

◆いつも前向きに、道を拓く

生まれつき軽度の弱視であった岩本さんは、13歳で残存視力を失い始め、16歳で全盲になりました。多感な思春期に見えなくなる恐怖で、一時は絶望的な気持ちになったそうです。「ネバーギブアップ」の精神で一歩前に進むことを選択しました。その後は進学や、さらには留学などさまざまなことにチャレンジしてきました。

◆ヨットを始めたきっかけとその魅力

2002年当時、筑波大学附属盲学校で教員だった岩本さんは、自宅近所の千葉県稲毛マリナーのレンタルヨットの存在を知りました。中高時代ヨットをしていた妻に誘われ、小型のヨットを借りて海に出てみたのがヨットを始めのきっかけだそうです。その時は、心の準備も追いつかず「ひっくり返るのではないかと楽しむどころではなかったそうです。しかし、そのマリナーで、障害者と健常者が共

にヨットを楽しむコンセプトのクラブと出会い、初回のセーリング経験とは180度変わり、セーリングができる週末が待ち遠しくなるぐらい熱中するようになりました。

◆太平洋横断の夢

2011年、あるヨット専門誌に掲載された「太平洋を横断してみたい方を募集します！」の記事を音訳録音で知った岩本さんは「これは私のために書かれた記事ではないか」と興奮しながら「太平洋横断」に向けての熱い思いを込めた応募メールを書きました。そのメールが関係者の目に留まり、岩本さんは「太平洋横断」に挑戦することになりました。

喜びの声

植村直己冒険賞という栄誉ある賞をいただくことになり、とても光栄に感じており、身が引き締まる思いです。今回の私の受賞は、これまで私の挑戦に関わってくれた多くの方々のご代表として頂けたと捉えています。特に、私の夢に共感し協力を買って出たパートナーのダグ(ダグラス・スミス氏)との出会い、協力がなければ今回の挑戦は成功しなかったと思います。今回の受賞をプラスに、これからもより多くの方々に、生きてることへの感謝、挑戦できることへの感謝、を伝えていきたいと考えています。このたびは本当にありがとうございました。

◆挑戦は何度でもできる

最初の「太平洋横断」は2013年6月、福島県を出港するも6日後にヨットとクジラが衝突し失敗しました。「僕さえ夢を持たなければ…」申し訳なさや恐怖心でしばらく海へは近づけなかったそうです。

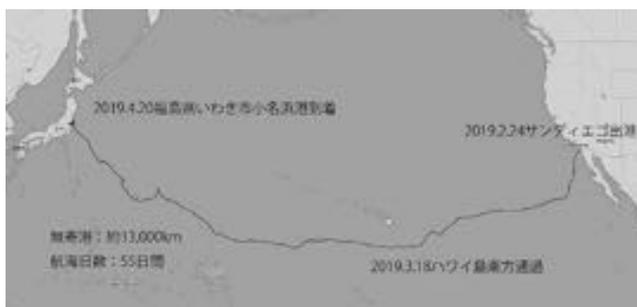
しかし知人の紹介で知り合った米国人のダグラス・スミスさんからサポーターの申し出があり「ネバーギブアップ」と言い続けてきた岩本さんは一念発起。19年2月、再び「太平洋横断」の夢に挑戦することとなりました。

◆チャンスはつかめる

「失敗したからといってリベンジしない理由にならない。

夢に向かって、一歩を踏み出す」と、岩本さんは語ります。そんな岩本さんに、これからもエールを送り続けていきたいと思っています。

《問合せ》植村直己冒険館
☎ 44-1515



▲航跡図 (提供：(株)舵社)